

Japa Newsletter (毎月 1 日発行)



掲載写真募集中

INDEX

1. コ ラ ム：日本にいま起きている歴史的転換
2. 寄 稿：古民家と生きる (建築家 瀧下嘉弘)
3. 解 説：日本の精神構造の深層
4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独・社会システム
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声：第二の人生 生涯現役で行く その 8 (作詞・作曲家 高橋育郎)
7. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ Japa からのご案内 ◆◆

○Japa Newsletter 掲載写真を募集中！

○Japa Newsletter の読者アンケートご協力をお願い

▶ アンケートの URL <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/questionnaire>

1. コラム：日本にいま起きている歴史的転換

Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

「トランプ 2.0」ではじまり、「高市政権」が誕生した 2025 年も今日から師走である。日本はいま、過去の延長線上ではなく、複数の「未来」が同時に励起し交差し融合する歴史的な大転換の踊り場にいる。戦後以来の仕組みの上に成り立ってきた「社会」の有り様が変容しつつある。

まず、気候変動の局面では、日本列島の平均気温が 100 年あたり約 1.40℃上昇しており、世界平均（約 1.09℃）を上回っている。さらに、1 時間あたり降水量 100 mm 以上の豪雨発生回数が過去数十年で約 1.8 倍に増えている。こうした変化は生態系・農業適地・生活環境を揺るがす地球環境的变化であり、「自然はもはや安定的背景ではない」という時代へと移行している。

次に、人口減少という時間性の危機である。2025 年 10 月時点での総人口は約 1 億 2,321 万人（前年比 59 万人減）と減少が加速している。この減少は、労働力、地域社会・共同体の再編を迫る圧力である。機能分化が進んだ現代社会において、時間の希薄化・未来観の断絶が起きており、「今ある仕組み」を前提とした制度設計では対応しきれない局面に差し掛かっている。

第三に、AI の急激な進化と普及は「知」の定義を根本から問い直す転換をもたらしている。AI により、「知ること」「学ぶこと」「創造すること」の主体が分散化しつつある。身体化も進みつつある。これは人間－機械のハイブリッドな存在への道筋と重なり、「人間とは何か」「社会システムにおける知の役割とは何か」という根本的な問いを日本社会に投げかけている。

第四に、地政学的リスクの変化である。覇権国家アメリカが縮退し、ゼロ極化／多極化が進み、空間の政治化・新たな安全保障環境の構築が急務となっている。日本は同盟と自律性のバランスをどう取るかという選択の場にいる。国・地域・世界という枠組みそのものが揺らいでいる。

第五に、経済システムの転換である。いわゆる「失われた 30 年」（デフレ経済時代）を通じて、成長モデル・資本主義モデルの限界が顕在化してきたが、ようやくインフレ経済時代に切り替わりはじめ、新しい価値創造（Sustainable Well-being Goals 等）が模索されつつある。

最後に、社会的分断と紐帯（ちゅうたい）の危機である。情報環境の変容、公共性の崩壊、孤独・孤立の蔓延といった現実が、「共－存在（Mitsein）」の基盤を揺さぶっている。これは単に精神的な問題ではなく、社会システムが統合メカニズムを失いつつある構造的な問題である。

これらの大転換は、相互に影響しあい、正・負のフィードバックループを通じてティッピングポイント（臨界点）に達しうる複雑適応系としての性格を帯びている。この大転換期に個人、コミュニティ、企業、そして行政・政治が、どれだけ柔軟に対応し、新しい社会の設計図（社会目標、パラダイムの転換）を描けるかにかかっている。日本の真価がいまこそ問われている。

補：本コラムの参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/> に掲載

2. 寄稿：古民家と生きる

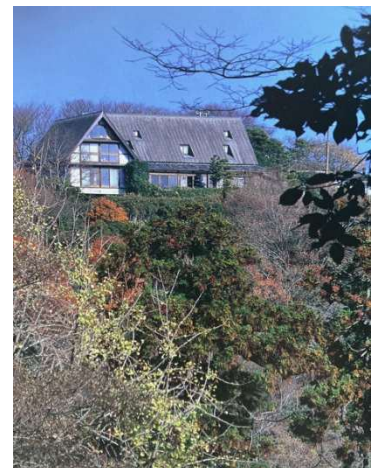
建築家 瀧下嘉弘

私が古民家に魅かれたのは 1963 年、大学進学のために東京へ来た時であった。六本木の防衛庁の近くにその古民家は在った。太い大黒柱と曲がった梁組と高い天井、モダンなキッチンには真っ白い大きな冷蔵庫、広い空間を温める床暖房が気持ちよかった。寒くて暗いという印象を持つ古民家がこんなに快適に近代的にそして魅力的に住める事を知り衝撃を受けた。その家主は美術専門の出版社を営んでいるアメリカ人で、群馬の田舎から六本木へ古民家を移築して住んでいたのである。

そのころ、生まれ故郷の岐阜では関西方面へ電力を供給する関西電力が荘川に御母衣ダム、九頭竜川に九頭竜ダムを建設し、多くの村が湖底に沈んでいった。何百棟という古民家は消滅したが、あるものは名古屋、横浜、東京へ、また、アメリカへも移築された。新宿の「白川郷」や渋谷の「ふる里」は移築し、レストランに再生させた貴重な成功例で珍しかった。アメリカでは合掌造り古民家が鉄板焼きレストラン「Benihana of Tokyo」として生まれ変わり、大いに繁盛した。1960 年代に古民家という言葉はあまり使われていなかったような気がする。そのような時代であった。

鎌倉で借家に住んでいた父とマイホームを建てようと移築出来る古民家を探していた時、白山麓に水源をもつ九頭竜ダム建設が始まり、多くの村が水没寸前となった。水没する村々は穴馬郷と称し、非常に不便な豪雪地帯の山奥で、平家の落人伝説のある日本の秘境であったが、生まれ故郷の奥美濃郡上から油坂峠を越えた日本海側の越前に在った。早速、みんなで見に行くことにした。穴馬郷の伊勢村の元庄屋さんの家に入った瞬間を今でも覚えている。農家特有の優しい、穏やかな、臭いが私を包んだ。それは昔の日本の匂いで、歴史を紡ぎ続けてきたホットする空間であった。大きな柱、曲がった太い梁組、高い天井に私は圧倒され、これだと思い興奮した。その時、運命が動いた。この素晴らしい合掌造りの家を只で持って行って欲しい。来月は雪が降るから、解体が困難になる、今しかないと云われた。私の脳裏に六本木の古民家が一瞬浮かんだ。早速、その場で紙切れを一枚探し出し、後で問題が生じないように簡単な契約書を交わした。形式ばかりの五千円で譲渡するという契約内容にした。法学部の学生としては、生まれて初めての法行為である！

こうして家は偶然にも簡単に手に入れたが問題は土地である。贅沢にも富士山と海が見え、安いという三拍子が揃うところを探し続けて一年半の歳月が過ぎていく。やっとのこと見つけた条件に合う土地は鎌倉の梶原大峯というところで、名前の通り最も標高の高い処に家を建てることになった。三拍子揃ったとは言え、水道、電気、ガスが無かった。しかし鎌倉市街と海が一望できおまけに富士山が見える場所に住めるのなら、雨水を集めてでも暮らそうと覚悟を決めた。だが、さすがに、最低、電気と水は必要だと考え直した。そこで近隣の地主たちに声をかけ協働で水を引き、電気は藤沢の東電との交渉は学生の私が



役目を負った。電話を引く事も困難であった時代だが、父が外国特派員で通信が必要だと訴えて、意外と早く引いてもらえた。

大工仕事は故郷郡上の大工さんにお任せした。なんと 40 日で完成した。私は運転手や岐阜から来た大工さんの世話係をした。幸運にも、そのころ大学は反米、ベトナム戦争反対、授業料値上げ反対等の激しい学生闘争で構内には入れず、授業も少なく、私のようなノンポリの学生にとって時間はたっぷりあった。卒業式もなく、就職もしないまま、夢にまで見た、古民家移築が終ると同時に、そこでの生活をせぬまま世界一周の放浪の旅に出た。無銭のヒッチハイク。世界 36 箇国を一年半かけ巡るという旅をした。帰国後、将来の自分の進むべき道を思案する中、父のすすめで関西の古美術商を紹介してもらい、すっかり、古美術に接する喜びを見出す。店を構えず自宅の合掌造りの大きな三角屋根裏で商売をするという、簡単で、面白い、変わった商法を仕事にすることにした。予約制で、鎌倉駅の西口と我が家とは私が車で送り迎えをした。誰も来ないかと思ったが、商売は口コミで繁盛した。

ある日、超富豪の外国人の顧客が富豪の友人を連れて来た時、我が家の建築に興味をしめし、古美術も好きだけど、この様な古民家を軽井沢に建てて貰えないかと云われ驚いた。自分は建築士ではない。面白い！無鉄砲でも何とかしてみようと思った。そこで、故郷で呉服商をしていた母親にまだ古民家が残っていないかと聴くと、あの村にはないが、隣村に良さそうな合掌造りがあるとのこと。早速、超富豪に見学に行きましようかと尋ねたら、即OKとなった。これで、人生が又狂ったのである。其の後、一級建築士資格になる為に猛勉強の末取得、建築士としての人生が始まったのである。

超富豪の家は今でも軽井沢にしっかりと立っている。人生は面白い。以来、口コミで予期せぬ建築の仕事が入って来る。アルゼンチンや米国へ 4 棟、国内は 36 棟ほど移築再生した。同時に、日本の古美術と古民家の魅力で国内外の大勢のお客さんに恵まれた。これも日本固有の伝統文化を世界に紹介する役目の一旦を荷っているかとちょっぴり自負しているところである。

私にとっての古民家は、一言でいえば、生きる喜びをくれる大切な家族で、伝統の持つ力に生かされてきた日々であった。自然に畏敬の念を持っていた私たちの先輩の気持ちを理解し実感できたことは有難い事だと私自身感謝している。

「我家の古民家」は移築してもう直ぐ 60 年経つことになる。



瀧下嘉弘（たきした・よしひろ）

建築家。1945 年岐阜生まれ。早大卒。

NP0 日本古民家保存協会理事長。ハウスオブアンティックス社長。米国コルビー大学名誉博士号。大工の技法を伝える「仕口堂」主人。



補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説：日本の精神構造の深層

Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

いま、日本と中国・韓国との関係に緊張感が高まっている。台湾有事をめぐる日中の対立、徴用工問題・歴史認識問題をめぐる日韓摩擦は、単なる外交上の利害衝突ではなく、各国の文化的・精神的基盤の違いが根深い影を落としている。このため、AI の力を借りながら、日本の精神構造の深層に焦点を当て、その歴史的形成と近隣諸国との関係を体系的に整理してみた。

(1) 多神教的世界観と「本音と建前」

日本の宗教文化は神道・仏教・儒教が重層的に習合した独特のものである。一神教のような絶対的道德律より、状況に応じた判断を重視する相対主義が根づく。神道に見られる「罪」ではなく「穢れ（けがれ）」の発想は、倫理を内面的な罪責ではなく、外面的な状態として扱う。このため、行為の善悪より「場の空気」や「関係性」が重視されやすい。仏教の日本的受容も特徴的である。鎌倉仏教は厳格な戒律より「信心」「心性」を重んじ、形式と実質を分離する宗教観を育てた。これは社会における「建前と本音」の二重構造と響き合い、国際関係では「表向きの声明と実際の行動が一致しない」という批判につながりやすい。

(2) 日本化した儒教——「忠」の絶対化と形式主義

日本では儒教が受容される過程で、中国とは異なる発展を遂げた。特に、武家社会では「孝」より「忠」が最上位の徳目として重視され、国家・主君への服従が倫理の中心へ移った。また儒教の「礼」も本来の内面の誠実と行為の一致という意味から離れ、形式の遵守そのものが目的化した。「誠意より形式」が優先される傾向は、歴史問題における「抽象的な謝罪」や「象徴的行為」にとどまりがちな日本外交の背景にもある。

(3) 近代に“発明された”武士道と「恥の文化」

国際的にイメージされる武士道は、実は明治期に形成された「発明された伝統」（近代において、武士の価値観を再解釈し『武士道』という概念が創られた）である。近世武士の実態は合理的・官僚的で、清廉な「武士道精神」が日常倫理であったわけではない。しかし、この近代武士道が強調した「名誉」「恥」の文化は、他者からどう見られるかを倫理の基準とする傾向を強めた。これは、内面的良心を重視する西洋の「罪の文化」と対照的で、国際批判に対して防衛的・感情的反応を生みやすい。

(4) 日本社会を規定する「世間」と「内／外」構造

阿部謹也（歴史学者）が指摘したように、日本では「社会」という契約的・制度的公共空間より、「世間」という人間関係の網の目が行動を規定してきた。

- 明文化されない暗黙の了解
- 同調圧力と「空気」
- 「世間体」という外部評価
- 「内（うち）」と「外（そと）」の境界

この構造は国際関係では「外」への冷淡さ、契約やルールより情緒を優先する対応として現れ、摩擦の要因になる。

(5) 「甘え」と「間柄」一言語化を避けるコミュニケーション

土居健郎（精神科医・精神分析家・評論家）の「甘え」概念は、日本人の人間関係を理解する上で重要だ。相手に察してほしい、説明しなくても分かってほしいという心理が強く、交渉や外交で求められる明示的コミュニケーションと衝突する。

さらに、和辻哲郎（哲学者・倫理学者・文化史家）の「間柄」の倫理は、個人の権利より関係性の調和を重視する価値観を理論化した。この発想は、日韓関係などで「個人の権利」より、二国間関係の維持を優先するという構図を生みやすい。

(6) 「無責任の体系」と「空気」の支配

丸山真男（政治学者・思想史家）が指摘した「無責任の体系」は、意思決定の不透明さと責任の曖昧化を特徴とする。誰も最終責任を負わず、事後的な「空気の同調」で物事が動く傾向が現在も続く。山本七平（評論家・思想家）の『空気の研究』が示すように、日本では論理より“場の雰囲気”が意思決定を左右しやすく、国際社会のルールベースの論理と齟齬を生む。

(7) 東アジア三国の「文化ロジック」が噛み合わない理由

日本・中国・韓国は、歴史的背景だけでなく、文化的論理そのものが大きく異なる。

- 日本：世間の論理（曖昧さ・関係性重視）
- 中国：面子の論理（威信・序列重視）
- 韓国：道徳の論理（善悪の明確化・正統性重視）

日本の曖昧さは、中国には「誠意欠如」、韓国には「責任回避」と映り、三者間の誤解を固定化させている。

(8) 変わりつつある若い世代とデジタルの逆風

Z世代は個人主義化、社会貢献意識、多様性受容など、従来の「世間」中心の価値観から離れつつある。他方、SNS上では「デジタル世間」ともいえる新たな同調圧力が強まり、「空気の可視化」がより強力になっている。

(9) 克服に必要なこと

日本が文化的摩擦を乗り越えるには、相手国が含めて、次の転換が欠かせない。

- 「世間」から「社会」へ——普遍的ルールと説明責任を重視
- 責任の所在を明確にする意思決定
- 文化的論理の差異を言語化し、相互理解の対話を進める
- 若い世代の価値観を国際関係に反映する

日本の対外摩擦は、宗教観・倫理観・社会心理・意思決定構造等、多層的な精神構造が複合した結果として生じている。これらの理解なくして、日中・日韓関係の持続的改善は望めない。しかし同時に、価値観は変化しつつある。日本が自らの深層構造を客観視し、他国の論理と折り合わせる努力を進めることで東アジアにおけるハーモナイズの道は開かれるのでなかろうか。

補：本解説の参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>

4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・孤立孤独・社会システム

[時代環境]

- ▼2025/11/26 〈サイバー攻撃〉日本はなぜ世界一狙われているのか？守備力の強化のために必要なこと Wedge ONLINE <https://tinyurl.com/279vc7zf>
- ▼2025/11/25 イノベーションの未来図—AI 変える変化への適応力 Forbes JAPAN https://forbesjapan.com/articles/detail/85635?read_more=1
- ▼2025/11/18 生物進化「カンブリア爆発」、地球の公転軌道の離心率変化が拍車をかけた可能性 | Forbes JAPAN <https://forbesjapan.com/articles/detail/85161>
- ▼2025/11/04 日本成長戦略本部（第1回）成長戦略の検討課題 内閣官房 https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/nipponseichosenryaku/honbu/dai1/kentoujikou_set.pdf
- ▼2025/11/04 エージェント型AI——生成AIの新領域 pwc <https://tinyurl.com/293ra4we>

[地方創生・日本創生]

- ▼2025/11/21 構造問題に迫る コメ価格高騰はなぜ起きたのか？ 迷走続きの農政 高木勇樹 元農林水産事務次官の直言 NHK <https://news.web.nhk/newsweb/na/na-k10014980441000>
- ▼2025/11/04 自動運転の社会実装に向けた「需要」と「受容」 ～人口減少社会におけるテクノロジーの社会受容に向けて～ 第一生命経済研究所 <https://www.dlri.co.jp/files/ld/534151.pdf>
- ▼2025/11/04 バスは減便、クマ大暴れ… 過疎化する地方の“切り札”「コンパクトシティ構想」は実現不可能な夢物語だ livedoor News <https://news.livedoor.com/article/detail/29913345/>

[COVID-19]

- ▼2025/11/12 妊娠中のコロナ感染、赤ちゃんの成長に影響は？3 歳までの発達を追った大規模研究を解説（忽那賢志）Yahoo!ニュース <https://tinyurl.com/2yuakkf3>
- ▼2025/11/07 コロナ禍に支給された「給付金」は妥当だったのか ～銀行預金 130 万口座のビッグデータを活用した効果検証～ (株)日本総合研究所 <https://tinyurl.com/2ynvs385>

[社会的孤立・孤独・ひきこもり・困窮]

- ▼2025/11/18 第8回 こどもの食支援の現状と課題 | 経営研レポート | NTT データ経営研究所 <https://www.nttdata-strategy.com/knowledge/reports/2025/251118/>
- ▼2025/11/04 AI が人間の「孤独」を解消してくれる——それが問題だ | WIRED.jp <https://wired.jp/article/sz-ai-is-about-to-solve-loneliness-thats-a-problem/>

[社会システム]

- ▼2025/11/19 第3回 米国に見る多様な合意形成手法と国内での実施例 執筆：根本祐二＝東洋大学国際 PPP 研究所 新・公民連携最前線 <https://tinyurl.com/2yhn2yov>
- ▼2025/11/05 民主主義に対する私たちの責任 グローバルに、ローカルに、どう行動すべきか NIRA オピニオンペーパー <https://www.nira.or.jp/paper/opinion87.pdf>

※企業・団体等で、特定テーマ・分野に係る情報のキュレーションの要望があればご連絡ください。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼ Japa Newsletter 掲載写真の募集

Japa Newsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter 編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japa は、随時、会員〔正会員、一般会員〕を随時募集しています。

会員申込みをお待ちしています。

○正会員：入会金 1 万円、年会費 1 万円 一般会員：年会費 3 千円

○入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

6. 読者の声

〔読者の声〕 第二の人生 生涯現役で行く その8 （作詞・作曲家 高橋育郎）

「心のふるさとを歌う会」を大手新聞に

「歌う会」の会員が 40 人になった平成 7 年 4 月に、東瀧代表が大手新聞社に取材を依頼してくれて、LVC にて記者会見をした。すると新聞のコラム欄に出て、そのとき代表は 100 人の申し込みがあるだろうと予言した。すると予言は見事に的中し、私が夜帰宅すると電話が鳴り、あとあと鳴りやまなかった。

更にこの状況をみた他の新聞社が取材にみえて記事にしてくれた。そこで 40 人ほどの申し込みがあった。

LVC では、「生涯現役の会」を発足させた清瀬市、日野市、鎌倉市など 6 か所ほどの主宰者に混じって私も紹介した。すると 6 人ほどが入会した。ここに大学教授や商社の役員、新入社員研修請負の方々がおられた。そして、その大学教授によって、私の会にピアノ伴奏者がきまった。その辺の経緯であるが、教授は自由が丘で自らセミナーを主宰していて、私に歌の指導に來ないかと声をかけた。そして「うちにはピアノ伴奏者がいますよ」といった。私は了承すると、ピアノ伴奏者が、私のところに電話をしてきた。ご親切にも「わたしが駅の改札口でお待ちしております」とのこと。さて、当日出かけてみると、その方は待っていて、会場まで案内してくださった。予定のプログラムが、たのしく恙なくおわると「帰りもお見送りしましょう」といって、自由が丘駅まで送ってくださった。そのとき「内の主人も国鉄ですよ。施設畑ですが」といい、それ以上は言わず、私も聞かなかった。それから私は「うちの会には伴奏の方がいないのですよ」といった。すると「では、わたしが伴奏しましょう」といってくれて、次回の日取りをいうと早速来てくださった。平成 7 年 5 月である。しかも謝礼はいらないとおっしゃった。野沢慈子と名乗り「家でピアノ教室をやっていて、出身は北海道大学教育学部」とおっしゃった。

新メンバーの方々は、口コミで会員を増やしてくれて、会員は、250 人ほどに達した。一度では教室に入りきれず、二組に分けた。前のグループを「すずらん」。後のグループを「りんどう」とした。そして「りんどう」の伴奏は、習志野市「青春の会」の栗原氏の奥さん、栗原靖子さんをお願いした。結局、月に2度の開催となった。

ここで私は、会のテーマソングを作詞作曲し野沢さんが編曲し、会の初めに皆で歌った。そのあとエンディングテーマを2曲作り、野沢さんと栗原さんが分担して編曲してくださった。

平成9年12月に5周年記念「私たちの学芸会」を開催し、川田正子さんをお招きした。会員は口を揃えて「ほんとうですか」と、驚きの声が上がった。このステージで川田さんと共演した。会員はこぞって川田さんを囲んで大騒ぎになった。

このステージで桃太郎歴史研究会からの依頼で作った「桃太郎さん音頭」に振り付けが付いて10人ほどが踊った。会員の中に日本舞踊をやっておられる方がおられ、振り付けまでやってくださった。

その後「私たちの学芸会」は折をみて行い、2年間の間に坂本紀夫（霧島昇の御曹司）。高岡良樹、白川雅樹ら各氏を招いた。

100回記念（平成13年4月）には歌のお姉さんこと田中久美子。神戸朋子、横山太郎（NHK アコーディオン奏者）を招き、更に5月には千葉市民会館にて横山太郎と共演した。

さて、この年会場が大きくなったことで、二つのグループは一本化した。そこで二人の伴奏者は、一か月交代とした。

ところで、この年には高木東六先生と坂本紀夫（霧島昇のご子息）のお二人とご交誼が始まった。サンケイ・ソーシャルクラブをやっていた高木先生は、お歳が98歳だったが、私を自宅近くに呼んで、お話しをした。高木先生は、昭和38年のNHK「あなたのメロディー」で審査員長をされていた。高木先生は、会合に私を何度か呼んでくれた。そして100歳になられたとき盛大なお祝いパーティーを開き、たしか三笠宮ご夫妻を招いた。そして、ダンスパーティーをやった。私は、そこまでダンスが身についていないので見る側にいた。先生は私と写真を撮ろうと肩を並べると女性たちが、私も私もと周りを囲んだ。先生は100歳記念CDアルバムを出して、私に郵送してくださった。

「日本の歌100年」をもって、「生涯現役会」の各地を巡回

清瀬市の「生涯現役」は「社会参加を考える会」と改名した。そして私を講師に呼んだ。テーマは「日本の歌100年」。カメラマンが3人ほど私を囲んだ。これは「全国図書館映画」になった。

これをきっかけに各生涯現役の会から呼ばれ巡回した。私が副会長の習志野市でも行った。

ここでエピソードをひとつ。平成7年3月。長崎市が編纂した「長崎被爆50年史」に私の詩「長崎の鐘が鳴る」が掲載され。そして、その本と鐘のミニチュアを頂いた。いまま床の間に飾っている。

土地と証券会社の詐欺

昭和の終わりのバブル景気に沸いていた頃、見知らぬ若い男がLVCに訪ねてきた。彼は房総の中ほど、リゾート地として脚光を浴びている町の、海岸から3キロ程ほどの処の土地を買わないかと売り込みにきた。当時は土地ブームに沸いていた。それで、土地さえ持っていれば、す

ぐに値上がりするから買っておいの方がいいと勧められ、それでは買おうかとなって、その場所を案内されて行ってみた。その土地は売地として整備されていて8区画ほどがあり、すでに3軒ほどは建っていた。海岸から離れていて、便利とは言えないが投資のつもりで買ってしまった。その会社は更に山形県に一軒空き家があるので買わないかといってきた、一旦は断ったが、みるだけみてもらえばいい、案内しますよと言った。そこで上野から家内と一緒にでかけた。ところが帰宅すると、100万円を要求してきた。宿代と食事代で、実費だから支払えと言ってきた。やむを得ない思いで支払ったら、社長は夜逃げして、行方不明になった。例のLVCを訪ねてきた男は、人間は善良な人で、毎月損害分を返済してくれた。それから、よせばいいのに、もう一つ家屋付の土地を買ってしまった。こちらは長男が引き受けてくれて、一時自分の住まいにした。しかし、長男にとって遠距離通勤になるので、貸し家にして今に至っている。

平成6年だったが、SN証券から電話があり、幕張駅で会いたいとのこと。私は出かけ、駅内のレストランに入った。証券マンは待って居た。早速言うには「高橋さんに、株で儲けさせてあげる」とのこと。私は前年に家を新しくした。費用は、母と私で折半した。それでも手元には何がしかのカネが残っていて、安心した。証券マンは、そのすきを狙ったかのように電話をしてきたのだ。しかも誠意を示すかのように、後日わざわざ我が家を訪ねてきたのだ。そして「私の言うことに従ってやれば、儲かる」と念をいれた。実は私は新しく各地に誕生した大型喫茶店の株を持っていた。そして、JRの株が欲しいと思っていた。そのことを彼にいうと「それではJRの株から始めましょう」と言って帰った。翌日からは、早速あれを買え、これを買えと言ってきた。そして、JRの株は変動がなくて面白くないから売ってしまい、他のものと替えようと言ってきて従ってしまった。LVCの友人に話すと、株の売買では、やってはいけないことだと忠告された。そのうち、損失が嵩んでいった。しかし、株屋はいつ大当たりするか分からない。一挙に取り返せるからと平気を装っていた。しかし、預金は目減りする一方だ。そこで、不安が募り、彼の会社を訪ねた。しかし、同じ事を繰り返し埒があかない。私は、それでは失礼しますと、玄関に向い、振り返ると、私を見送る彼の目つきが異様な悪さに気づいた。これは騙されたかとおもい、気になりながら家に帰った。とにかく、あの目つきの悪さが気になって、二三日後に行ってみると彼は辞めたということで、姿をくらませた。それきり連絡はとれなかった。それから10日程たったであろうか。SN証券は破産宣告したと報じられた。悪は栄えずだが、一方自分のおひとよし、世間知らずを恥じた。痛い目に合わされたことで学ぶこともあったと慰めた。

さて、ここでエピソードを二つ。舞台は東金市の小学校。野鳥が校庭内に落下したのを児童がを見つけ、みると野鳥は傷を負っていた。児童は傷の手当てをして、治った野鳥は元気になって飛び去っていった。この話を聞いた千葉県作詞作曲家協会の作詞家、栗山氏が作詞して、私に作曲を依頼してきた。「ありがとう」と題する詞で、私は求めに応じ作曲した。栗山氏はこの歌を同校に送ったところ、市の市民会館ホールで児童たちは合唱した。私は招待されたが、用事のため家内が代わって行った。その模様はビデオになって送られてきた。合唱の指揮をした音楽担当の教諭から、お礼の電話を頂いた。

たしか平成6年だったか。民放テレビで人気を博していた山本文郎アナから電話があった。このころオープンした民放テレビ開局記念番組に出演の依頼だった。番組収録は神田駅から徒歩

15 分くらいのところだった。山本アナと私は同年の国民学校生だった。そこで対談の中で、唱歌「国民学校一年生」を二人でうたった。(続く)

7. つぶやき（編集後記に代えて）

年明けの「トランプ 2.0」の関税騒動に始まり、高市政権発足と直近の「台湾有事」騒動と、ざわついた1年も、いよいよ「師走」に入った。すでに、クリスマス商品や、正月用品が店頭
に並び始めている。リアル世界と SNS 世界がない交ぜになって、世界、東アジアが、そして日本がこれまでとは違った空気感が流れている。そうしたことを背景に、本 Newsletter のコラムでも戦後の転換点の振り返りを取り上げてきた。そして、今月号で、現在起きている転換点について考え、さらにその深層にある精神構造にも言及した。これらを踏まえ、次は、日本として、今後に向けて、何をやめ、何をすべきは考えてみたい。AIとの共存・共創が続く、…。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>
問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp